フレッシュトーク

経験は最良の師

唐澤翔太　（高69回）
東京学芸大学教育学部４年

●からさわ・しょうた
豊丘村出身。高校時代はサッカー班に所属。大学では社会科教育について学びつつ、西洋近現代史を専攻。趣味はスポーツ観戦、読書。写真は、アーセナルFCの本拠地ロンドン、エミレーツスタジアムにて。

「あっという間」この言葉を初めて使った人は、自身の非凡さを評価すべきであったと思う。時が早く過ぎるさまを表すことわざであれば、他には「歳月人を待たず」や「光陰矢の如し」などが思い浮かぶだろう。もちろん、これらも平凡な私にはとても表現できるような言葉ではないのであるが、「あっという間」のもつ親しみやすさには、とてもかなわないと私は思う。歳月のように実際に時間を表す言葉でも、矢が飛ぶように具体的でもない、「あっ」に込められたその余韻は、大変奥深い響きであると年を重ねるごとに気付かされる。「余白」だったり、「幽玄」だったり、そういった「間」を重視することに長けた日本人ならではの感性なのだろうか。詳しいことはわからないが。

私にとっての「あっ」は、２０１４年3月の高校受験の合格発表の日から始まる。掲示板を見て自身の合格を確認し、安堵と高揚感に包まれる私に対して、母親から「ここからは『あっ』という間だから」という言葉をかけられた。当時、表面的な意味だけでそれを理解した15歳の私だったが、現在22歳になり、学生生活の終わりに差しかかった今、その言葉の重さを身に染みて実感している。

そんな颯爽（さっそう）と過ぎていく日々の中で、奥深さを形成していくものは「経験」であると思う。情報通信技術の発達が進み、手軽にさまざまな情報が手に入るようになった現代ではあるが、その人自身の経験というのは何事にも代えがたい貴重なものである。インターネットに表示された情報を見るだけで、知識は得られるかもしれない。しかし、実際に自分の五感で経験したものは、知識以上のものとして自身に刻み込まれていくのである。

大学生活の中で、私の生き方に大きな影響をもたらした経験は、塾講師のアルバイトだ。まず、上京した際の個人的なカルチャーショックの一つに中学校受験というものがある。豊丘村に生まれ、豊丘村で育った私にとって、そもそも中学校を選択するという概念自体が存在していなかった。しかし、東京の小学生とその保護者にとっては、将来を見据えたときに中学校受験というのは比較的有力な選択肢である。中学校受験をする小学生を担当するということは、そのような経験のない私にとって一種の恐怖であった。しかし、保護者の方々の期待に応えていくためには、自分が未経験であるということは決して言い訳にはできないと感じていた。本来であれば遊びたいであろう放課後に、机に向かって勉強することを選んだ生徒たちの覚悟に対して、経験のなさを埋めていくだけの努力をしていこうと自分に言い聞かせた。

その結果、講師として生徒たちやその保護者の方々と関わる機会は、本当に有意義なものとなった。また、生徒たちの受験では、本人たちと同じかそれ以上にそわそわしていたと思う。同様に、未熟な私をサポートしてくれた先輩方との関わりもとても有難いものであった。今考えると、まだまだ努力は足りておらず、もっとやりようがあったと感じることもあるが、そういった反省も含めて、この経験は私の人生において大きな意味をもたらしてくれたように感じる。このアルバイトを選択したこと自体を後悔したこともあったが、そういった感情も含めて、大きな財産となったのである。

大学4年生となり、学生生活には終わりが見えてきたものの、私の人生はまだまだこれからも続いていく。学生ではなく、社会人としての責任が発生するこれから先は、今まで以上に大変な道のりになってくるだろう。しかし、そういった困難も自分自身の経験値に変えていけるように、日々精進していきたい。今現在、私は教員になるために勉強している最中である。もし自分が教壇に立てるようであれば、これまでの経験を踏まえ、結果を恐れずに経験を積んでいってほしい、ということを生徒たちには伝えていこうと思う。

あなたたちの学生生活も「あっという間」なのだから、と。

昨年の夏は富士山登山を経験した。日本一の高さからの絶景は見事で、登山は登りより下りが過酷であるということを実感